

### 第3話 めでたいおばさんたち東照宮を訪れる の巻

日光は、関東東北地方の人なら修学旅行や遠足で一度は訪れる、観光名所です。東照宮は全体的に彩色された豪華絢爛なお寺で、門、塀、柱、何から何まで彫刻と色が施されています。動物、植物、中国の故事、次々に展開される物語に目を奪われながら、順路を追って進んでいくと、「見ざる言わざる聞かざる」の彫刻、こちらは神馬の小屋を飾っています。小学生たちが熱心にスケッチしていましたが、みんな「難しいもの選んじゃった」と途方にくれた様子でした。

美しい陽明門で揃って写真を撮り、眠り猫の前に到着。小さな白黒猫が丸まって寝ているだけ。名匠左甚五郎の作とのことですが、これが皆に愛されているのは平凡な猫が題材ということも関係がありそうです。立派な虎や龍、鳳凰、華麗な花々が溢れる中に、場違いなただの猫がいるのです。知り合いに出会ったような、ほっとした気持ちにさせてくれる、こんな遊び心が名人の作たる所以だと思いました。眠り猫の裏では、庭で虫をついばむ雀が3羽、のんきな猫に安心しきっています。この一対で争い事が無い平和な時代の到来を描いているそうです。



眠り猫の門をくぐると、200段の階段が待っていました。この上に家康公のお墓があるのです。登りました、文句もいわずもくもくと。一休みしたい、お茶のもう、へとへとだあといいつつ誰とも無く、清めの水をごくごく飲んで、人心地つきました。いままで気がつかないのですが、神社やお寺に付き物の清めの水は、旅人を癒す水でもあったのです。

さてさてお待ちかね、ご本尊の参拝です。でもそのあとの珍事のお陰で、ご本尊の印象は全く無いのです。何しろ江戸の昔は庶民が立ち入ることを許されなかったという本堂ですから、下駄箱が立ち並ぶ玄関で靴を脱いで、厳かな気持ちになって参拝します。天井の絵やご本尊様もきっと立派だったに違いないのですが、全く記憶にありません。

めぐさんです。なんとストールを忘れたと言うのです。階段を上って暑くなってストー

ルを取り、水を飲むときにそこらに置いたに違いない、と私はとっさに判断して覚悟を決めました。4人の中で一番足が速そうなのは私です。「行く」と言い残して素早く玄関へ、すると、そこにはストールどころかデジカメまでとぐろを巻いて置かれているではありませんか。階段を上らずに済んだ喜びと、自分のおちょこちょい、めぐさんのぼんやり、笑いが止まらなくなっていました。心配顔の3人も行ったと思ったらすぐ獲物を手に戻ってきた私に、にこにこ顔です。めぐさんは以前日光の駐車場のトイレに財布を置き忘れてもそこにそのままあったそうで、来る途中の車の中で日光の素晴らしさを自慢していました。言ったそばからの出来事でした。めぐさんに負けずに篠ちゃんも財布は戻るといっていましたし、私も同様、めでたいおばさんが揃ったものです。

鳴き龍を見て（聞いて）警備員さんに従えて、つまり閉館ぎりぎりまでということで、怪しまれてというわけではなく、東照宮を後にしました。 続く